大連外国語学院での日本語教師の仕事についての感想

アジア文化学科2006年卒業　野中　千愛

私は今、中国遼寧省大連市にある大連外国語学院旅順校舎で日本語教師をしています。日本語を専攻する中国人大学生に日本語を教える仕事です。毎週７クラス、約260名の中国人学生の日本語会話と作文の授業を担当しています。20歳の学生たちの興味は幅広く、歴史や文学からアニメや漫画、最近の日本の流行やファッションにも敏感で、様々な話題で授業が盛り上がります。日本人の考え方や、礼儀作法などを教えて欲しいという声が多く授業準備をする際にはそういったことも踏まえながら、話題を用意します。日本語を学ぶ上で、敬語の使い方や場面に応じた言葉遣いをすることは教科書で覚えただけでは実際にどう使っていいのかわからず、難しいようです。中でも、日本人の「間」の取りかたや「距離感」「本音と建前」などは言葉では伝わりにくく、会話やスピーチの指導の時にはどう教えたらいいのか戸惑いました。学生の日本語能力は高く、日本への留学や大学院進学を希望する学生が大勢います。将来は経営者や通訳、外交官や日系企業への就職を志望する学生が多く、授業では、思わぬ質問を受けることがよくあります。想像もしないような視点からの質問に答えることは大変ですが、学生と交流する度に自分の価値観も変わっていき、とても勉強になります。学生たちは日本語を使って自分の夢や悩みを話してくれますし、作文にも豊かな表現で様々なことを書いてくれます。教えるというより、私の知らない世界を学生から教わっています。

現地の生活では文化や考え方の違いを発見する度に、自分の考え方が広がっていき、とても充実した毎日を過ごしています。現地の先生方も優しく、私の生活をサポートしてくださいます。大学時代に北京へ語学留学していたので、その時の経験が自分の中でとても良い支えになっています。

今思うと、もし筑紫女学園大学へ進んでいなければ、このようなご縁には巡り合えなかったかもしれません。私を支えてくれた先生方や両親、みんなに感謝しています。アジア文化学科に入ってから大学の授業を通して国際的なアジアの現状などを知り、福岡にいくつかある国際交流広場へ行き、福岡に住む外国人留学生と交流を深めているうち、次第に現地で学びたいと思うようになりました。そうして、大学２年生の時に大学の留学プログラムで北京へ語学留学しました。ポルトガルやインドネシア、韓国など様々な国から来たクラスメートたちと交流し、現地の中国人学生に日本語を教えたり、相互学習をしたことで、日本語を教えることに興味を持ち始めました。帰国してからも日本語教育に関する授業を履修し、太宰府の公民館にある日本語教室で日本で働く外国人に日本語を教えていました。そこでの出会いが私に衝撃を与えました。両親に連れられて外国から日本に移住してきた子供たち(不就学児童) の問題に直面したからです。家では母国語で話しますが、両親も日本語がわからないため日本の学校に通えないのです。今、日本は多くの外国人を受け入れる体制をとっています。私が大学に入学し、卒業するまでの間に福岡も変わりました。今や博多駅を歩くと必ず外国語が聞こえてきます。最近は百貨店の店内放送に韓国語や広東語が加わりました。日本はもう日本人だけのもの

ではなくなったのを実感します。しかし、外国人が日本を見ているほど、日本人は海外を見ていないようです。学生から、「日本人は礼儀正しい民族ですね。」と言われますが、実際には外国人に対して横柄な態度をとる日本人を見かけます。私が今まで知り合った人たちは、「日本を知れば知るほど好きになってきた。」と言っていました。実際に私も中国語を通して中国人を知り、中国を理解できたからこそ、中国が好きになりました。好きになると、よい関係を築きたいと思うようになります。これは外交関係や日本に住む外国人にとっても、日本人にとっても良いことだと思います。一人でも多くの外国人に日本を知ってもらい、好きになってもらえるように、これからも日本語教師を頑張ります。